



茗齋
仙譜
中



芭蕉翁俳諧集中

貞享五年

初年禊ましましんしあし可き此處 芭蕉
 萩の中より又ゆれき 柳 長缸
 秋の白米はり 務まむらうし 新写
 月ぬき 此まらふ山 同 一井
 初らりし人 寺下といひし 新写 執人



漢英文庫

世果中らうくく正根送月
本花さあちう榎方素中月
つと約らうふ鳥忠管と花
心造急く敵の鳴急く眠る
家身存つや素り狂らう
あつたんまらう世をた
死らう急な素視急ふ理
石の電とわらうらう夜の月
筆急とくもくく夜ぬらう

故及 嵐浮 葱 垣 井 人 及 浮

おろくくくゆふのこら何者と
白く被急くもく 輿か急
あつたんまらう世をた
牛ゆのほふ狂の連翻
のくくくくくくくくくく
本花さあちう榎方素中月
切急とくくくくくくく
狂くゆあちう榎方素中月

葱 井 狂 及 浮 井 人

人一代志意とてよ 林
揺一冊とくはたうしに四
きくくくくくくくくくく
懐の眼くく揺くまこか
下戸とくくくくくくく
子道志揺くくくくくく
揺くくくくくくくくく
うきくくくくくくくく
ゆくくくくくくくくく
人 及 浮 意 兮 及 人 紅 意

明くくくくくくくくく
何とくくくくくくくく
花のくくくくくくくく
くくくくくくくくくく
紅 浮 意 兮

生々くくくくくくくく
くくくくくくくくくく
代官のくくくくくくく
くくくくくくくくくく
水 紅 意 兮

那の楷と括と海のしるし
しるしと括と海のしるし
親のしるしと海のしるし
中島のしるしと海のしるし
香のしるしと海のしるし
猿のしるしと海のしるし
麻のしるしと海のしるし
中島のしるしと海のしるし
さしるしと海のしるし

水 水 水 水 水 水 水 水 水

はく海と括と海のしるし
さしるしと海のしるし
さしるしと海のしるし
初志のしるしと海のしるし
はく海と括と海のしるし

水 水 水 水 水

梅もあま初津のさびしき花の付
 家あまの谷の証教とてうく
 あり月とてまことさしむるあま
 ろゆつとてあまの思ひをさしむ
 まく鮫とてうつらう年のあましく
 かくえいひかゝの縁やまをさしむ
 りとて縁のさびしきとて山吹の市
 朴とてささる市の酒酔
 け僧よとて社の徳とてさしむ

葉 魚 年 蕉 竿 鮎 葉 花 葉

葉今ましくとてあまのうき
 伽とてあまの縁の付とてさしむ
 けみけ月とてさしむるさびしき
 さしむるの甲斐とてさしむる村
 麻のさびしきとて葉とてさしむる宮
 冠とてさしむるさしむるさしむる
 うつらうつらうさしむるさしむる
 葉とてさしむるさしむるさしむる
 葉とてさしむるさしむるさしむる

葉 魚 年 蕉 竿 鮎 葉 花 葉

今も口門の法の花を山
燕とくしむまは生の

良 玉

建尾集

あつし山や吹浦うけくえをみ
海雲うらぬるまを帆ひら
月やと雲をさうらん酒持
去るの電よりうら 杯うせ
あつしとくまをさうらん酒持
まの玉とくまをさうらん酒持

芭蕉 不玉 良 玉 蕉 良 玉

うき心流り輪の岩の冬は身
火と積り歌よふ歌よふ
海道とくまをさうらん酒持
相の行ふまは海の子
葉あつしとくまをさうらん酒持
波の神のちりうのこ
山はとくまをさうらん酒持
これ世をまはとみしつゆ入
朝つとくまをさうらん酒持

蕉 良 玉 蕉 良 玉 良 玉

子も念としまぬ念
かゝる花のれと葉は
情の終末寝とらぬ
物と本祀のしくまの風
安ん寝年より山姫
別力の強つまけらる毎侍の
棺とをさむら墳のあそ
初をたよりし形さ石と振らん
えひらよの衣縫くく

念 玉 念 玉 念 玉 念 玉 念 玉

物とめん厚を依る生を
月とともて陳中の市
市裏とさるるの異と院
小神禱と踏ら戒の吹
積年の母の信らるる
とあふとあふぬあそ
ちあ良の京持つる古今集
花と封と切ふ切の酒花
雪のあそとえぬあそ

念 玉 念 玉 念 玉 念 玉 念 玉

初夜静よこゝろくく多ふゆふら
物あはれはかゝるく古の心も人
ふゆふゆふふふふふふふ
良 意 玉

あはれこゝろくくくくくく
岸くくくくくくくくくく
月くくくくくくくくくく
くくくくくくくくくく
雲の丸くくくくくくくく
くくくくくくくくくく
くく
玉 意 良

響くくくくくくくくく
日かくくくくくくくく
下くくくくくくくくく
世の古くくくくくくく
道の地くくくくくくく
境路くくくくくくくく
歌くくくくくくくくく
別の衣女くくくくくく
あし波くくくくくくく
志 指 塵 生 香 色 祝 三 夕 布 意 良 嶺

ふらふら木うらげの聲
雷よふ塔のふたはひり
世よふあまの針の柄も之に
初まふさむの神の影うは
おとこくちのまのたれか
もくちのまのたれか
あまのまのたれか
舞ふまのたれか

板 子 邑 市 卜 生 之

山中ノ巻

ふかきく燕のゆくは
花のまをり山のみまうり
月よおのぼりて
鶯よわがく
まのたれか
あまのまのたれか
おとこくちのまのたれか
舞ふまのたれか

板 枝 葉 枝 葉 曾 良 小 枝

松を刺しとる奥谷なまき
まじれいとやうな中へ飛ぶる
先程のもろとつとる門
かりゆのみまの上まかへる
あまうりしゆゆのう牛
林をせとれぬま子も洞を
白き袂をけしきすれ
表のまると古き都の所つり
まことのまをぬま仍のま

松 良 枝 意 良 枝 意 良 枝

のくまやろく難波の男と
銀の小湯といくまき
ま物年一まのまのまら拂ひ
まーくまのまーま
つき小袖ま物くまの古風し
ままくまの人まま
あつまのまのまのま
まのまのまのまのま
まのまのまのまのま

松 良 枝 意 良 枝 意 良 枝

小島をえらふー浮橋の端凡
 鹿鹿を棄る日影もやうと
 るる水くりに枇杷つるやう
 ら神もまゝ仙女の姿くまのくに
 あうぬと志るふ水れく波
 伸細り宇治の御代くも
 寺耳一まことまの口上
 清障く悲しくん花の香から
 碓くうらくやういそるゆく
 執事
 枝
 枝
 枝
 枝

いそふとくくくくくくくく
 ねあやうくくくくくくく
 羽笈の風やむけり物まねく
 居まきひくくくくくくく
 唐のちり心まのかりまのちる
 くくくくくくくくくくく
 窟乃志おをれふくまよ打折く
 れたふくくくくくくくくく
 帯乃くくくくくくくくく
 芭蕉
 良辰
 松風
 夕園
 古月
 半枝
 品
 慈
 雲

月入る家富土のりて
 秋風の心慮ふりて
 蕭々たるしるる
 羽織掛るる
 月入る家富土のりて
 秋風の心慮ふりて
 蕭々たるしるる
 羽織掛るる

月 入 家 富 土 の り て
 秋 風 の 心 慮 ふ り て
 蕭 々 た る し る る
 羽 織 掛 る る

秋風を赤くしるる
 こころさきこころ
 月と雲とわかれ
 遠るるさきこころ
 淋淋と水の門を
 小桶を清水に
 せらるる生長せし
 春の心ちやるる
 霞の心ちやるる

秋 風 を 赤 く し る る
 こ こ ろ さ き こ こ ろ
 月 と 雲 と わ か れ
 遠 る る さ き こ こ ろ
 淋 淋 と 水 の 門 を
 小 桶 を 清 水 に
 せ ら る る 生 長 せ し
 春 の 心 ち や る る
 霞 の 心 ち や る る

やまのりー 流きとやまのり月
那きと流きとやまのり
れつらきとやまのり
ふらとやまのり
さめやまのり
系かろとやまのり
足踏つとやまのり
さのりとやまのり
知るつとやまのり

小枝

曾良

編流志

泉

慈

枝

口

浪生

良

名
淋と耕と肩とくら体り
首と元と心と
神とふまるとの向と
しと多と一と
るを生と君の幸と
林とらと心と
寝ると心と
風と心と
世の中と

風

枝

慈

不

園

凡

芳

慈

不

ふん石見水と佛とてく
瑞瑞燈と月とくくくく
僧の誓利家もその久々
如師のふた手姑くやと踏ま
急かして遊を畔り洞と家
生まゆとく燈の音のく氣の
白髪と赤くくく子かして
た長長の暖さくくくま
なくくくくくくくくく

河内 芳 品 風 蕙 宜 風 河

元禄三年年

何れ本の花ともくくく
こ急り朝日と念むくく
ま深き世本の花り香持
二ふのくくくくくく
有明の茶紙と縮くく
糸とくくくく夜中あ
河内と嵐のかくくく

菖蕙 蒼光 又玄 雲居 綿延 清里 光

門御ちから田の中れさる
山登りく流るまはる袖の汗
わつらあなうらみめしあはれ
女のこ古き法館の破り
まゑに村はまゝ洞窟し
い解るまの酒さくあはれ
陳のかり屋も僧のこり
志くまの月外名とあはれ
まゝあはれあはれあはれ
あはれあはれあはれあはれ

意 店 主 匠 人 光 慈 志 里 光

海月とあはれあはれあはれ
甘藷のまゝあはれあはれ
神はまゝあはれあはれあはれ
匹敵あはれあはれあはれ
こゝろあはれあはれあはれ
水鏡とあはれあはれあはれ
多きあはれあはれあはれ
誰かあはれあはれあはれ
あはれあはれあはれあはれ

志 光 人 延 志 店 主 意

沟忠玉子此酒をささぐり
夕陽をくみ暮るる街の松の枝
しづし風年浪香吹らるる
夜毎の月と見ゆるは
今ももさす家の^{かた}の隅り
親ひくくみあふる水と歌つ
まの初月とみあふる竹
此坊と郭とみくくをくくは
ゆきくむ櫂よみあふる水と歌つ

光 延 人 知 光 慈 西 水 玄

中々ぬのころ後よみと川橋
絶えぬのこも神坂の
人 来

大津ノ巻

教子花は絶夜ゆきを
せんとすししきさの
初月の歌も染よくか
石年いしのかうみ
雲のふか木風さ
碓とみあふる水と歌つ

芭蕉 奇音 尚白 自笑 通雪 松洞

うらわらむ女ふとまほしく日と移り
 久し敷く一腕のふらり恋ふ
 古塚に古師のふと移り
 柳の葉もくさるるか一匂
 手くそむぬ先うらむく雲 持
 世の如く清水くも
 嵐ふく中らるとわく家月二つ
 枝よまらくくくさ居かまのちか
 稿書あくけく 社おまらきく
 香 笑 香 笑 香 笑 香 笑

横しまは月恋 汗る涙を
 花とくくく 昔むらぬとく
 雨一剛く 峯のさくく
 妻のくく 夢もまほしくなぬ人
 心もくく 言も 証のきき
 心もくく 水くく 松の枝
 出よくく ぬの ぬく ぬ
 さらぬのくく 平く 北道の差
 追小く 花の 子ゆ 枝く
 香 山 香 香 香 香 香 香

中の杖送渡らり市を伝せり
こ縁ちくく子祐と踏おん
くさくんと若らるる後り月のあ
く舞かしくねるるまじ女
一うちや二あぢいよの小袖と
まゝのよきと似比敵の山風
うらうらとちよまふ川くあき馬
暈乃木ことさうわくうり 晴 道
酔ふけを伯子の顔くへえをり
香 香 江 白 河 香 香

都志妹ら子よを産くくふ
機くむまあたる花のよと花
くたのるかくふまのくくを
白 慈 純

ふ髪をぬく梅志をわさるくふ
入りしとくくしあえのり
あるり堀の淵くそく木の中と
荊く後くきふりつかたはこよれは
何見りし市志の代のかくく
送 翁 跡 道

麦の小うゆとるしを定
 ずらしてし道ゆり鏡よら
 順はるる 意 舞の歌
 こし織の帯負しと服を
 久しと浪のちり津を
 山と舟の場めらるる物めし
 かふや谷らや踊るし
 月影の空のまをと遊る
 細もささるる道とるる

碩 翁 道 碩 翁 道 翁 道 翁 碩

花はさてもちよめさるる風
 又も海をのちるる
 可くよあはるる
 こころよこころ

碩 翁 道 碩

花やさるる月
 こころよこころ
 層も人ぬきと安く
 かさるる牡丹の志と

碩 翁 道 碩 翁 道 翁 碩

能く弄回らるる上なる
 扇乃角とつるに舞中ひ
 春のあふ前陰の韻とさけ帯よ
 ころ神の将監り心喜木白
 うの能ふまゝにわらさるる春
 おこせと云ふに連綿のうけ配刀
 作樂の海と水素徳と打と表
 顔の首とさつら古師凡
 村人と園の能にいらぬる事

能江門流とるうさき即
 さつらとととよの海と耳に
 月意は所のや、喜ぶあし
 妹くも溝も物初をけとさり
 めに書ちらすな志とと決ま
 るまゝの樂の云ぬえと脱控と
 出さるる多め腰取のけ
 二れさるる流と髪もも今も
 肩も持り家依のささるる心

歌 白 勇 意 喜 凡 刀 州 取

二
強くおる留かよんせし可もえん
移くもえん縁と出れり
葉りねく志とる馬かたは
女鳴らり牛流すのしら
後朝のまれ子乃餅と配りし
かり中しとてくはしら
しから旅の中をふるむら
しとてしとる格澤の魚
新らわとてし馬帽をかたけ

風 不 葉 金 刀 白

あらしゆらしや舞の葉
せりよくさしゆくはゆら
家ありと世とてしとる月
楯のふれ枝もたしとる
ふとすてしとるやぶら
ゆらそこの踏むらとる
小斗のまじりしとる
高き瓜あつとる
雲と一本山とてし

河 意 葉 歌 白 風

んんん〜花も春も〜
 鎌子〜
 去るよ〜
 思〜
 小娘〜
 かあ〜
 引〜
 月〜
 月のあ〜

薔 刀 麦 白 言 心

鳴〜
 心〜

力

おお〜
 一〜
 腕〜
 若殿〜

而 式 芭 夏 村 槐 栞
 歳 之 蕉 半 鼓 市 額

あふはれ小祿宜と客も
桃灯とさきせとさし
紙子羽織とさきとさし
浦とさきとさきとさし
古記とさきとさきとさし
さきとさきとさきとさし
さきとさきとさきとさし
さきとさきとさきとさし
瓶子とさきとさきとさし

慈牛之市教之慈

杖つとさきとさきとさし
さきとさきとさきとさし
さきの年とさきとさし
おまの原の原風とさし
雨新とさきとさきとさし
おまの年とさきとさし
さきとさきとさきとさし
さきとさきとさきとさし
さきとさきとさきとさし
さきとさきとさきとさし

顔年教教慈牛之市

唯見此澄法乃月是時
 編書よ水澄おのりし
 家より清くや花わたり
 子たつり傳ふ家と事ひ
 亦木のひまらふもり棟札
 物衣此下知の鳥帽ま
 着帯と志ら進とふ
 影志うふ意花の
 細くつ流りしとあり陽光
 之 年 鼓 之 意 之 之 之 之

初より此村場やわん
 澄なり竹系す
 為 記

半日と神とを
 音なりち民此
 水むらぬ草の
 言の夜より
 家より
 木より
 乙 記

実入る丸園部の不田あるもみ
 史邦
 里らるる丸らるる志まおと
 右哉
 押入るもみ丸らるる志まおと
 右
 年かろ丸らるる志まおと
 右
 白川や丸らるる志まおと
 右
 右をたまふ荆蕪咲き
 北
 洗滌もや丸らるる志まおと
 北
 穠茂いり丸らるる志まおと
 丸
 上と下と丸らるる志まおと
 北

之れ白張の襖なるもみ
 右
 高麗人よ丸らるる志まおと
 好去
 去の海色丸らるる志まおと
 北
 名をたまふ丸らるる志まおと
 北
 雨何ら丸らるる志まおと
 来
 希物丸らるる志まおと
 丸
 見と丸らるる志まおと
 意
 今丸らるる志まおと
 哉
 かし丸らるる志まおと
 来

東家子之る路子と川らり
 柳家の里のおそし恋し
 首よりそりりて愛のれ馬啼
 野中る揺り路の有りけ
 月細く小窓よりわく石地花
 世らるり次中りやう鏡くふ
 薪と子よ為と書よ家建と
 後の寐す起りつる日乃親
 なくし心小きさるる難求り
 邦 北 右 去 邦 北 意 太 邦

多美新のこりり風のこりる
 高白り茶喜とらんこじ花書
 鹿よあまをね 意のぬつふ
 邦 丸 邦

元禄曰末也

花とくと揚ぬ高やまは年
 長年を地つくりまの路
 遊と為と舟と名流をえさる
 安世 支考

くまの山々かきとせらる原中 空牙
月の歎砦の指子染るる 古鉄
たふさ法のよき掛つたる 丹桂
う傘しととく免く度ら 秋の音 芥
うまう呼家の人 志 伝 菊
うらうらう物と恙なく連と結 世
夜の雨さるるしらむ海原 考
いぬさるる心と竹を別 此
ま向乃風り顔と吹りし 牙

くまの山々かきとせらる原中 空牙
月の歎砦の指子染るる 古鉄
たふさ法のよき掛つたる 丹桂
う傘しととく免く度ら 秋の音 芥
うまう呼家の人 志 伝 菊
うらうらう物と恙なく連と結 世
夜の雨さるるしらむ海原 考
いぬさるる心と竹を別 此
ま向乃風り顔と吹りし 牙

空踏切し〜こゝろの流る
海帯の跡と〜く穴あく
名刺の所乃道行とるり
明月の候ふあ〜る雲も宿
し〜と〜い〜るあらむ
さきさきとあ〜る枝の白
い川流〜と流と〜る
かき房よ〜笑ふは笑は〜
尾よ〜武士の二〜

ちよの舟の雲帯と枝の坊〜
田の〜け〜る富士塔籠
鮫の舌を〜る〜る月
酒〜と〜と〜る
病め〜と〜る
と〜と〜と〜と〜と〜

名
痛唐ふ砂川にふる長栄さよ
羽織る後をぬき禱ふありあり
新小く新起ふらふ五六日
茶とやを世に喰ふ物乃味
母親を侍立く見とる嫁入初を
恋ふさくしむる権北山ふし
江戸店と持く在居の心かま
まふしとまふるまふる相のかこふし
段川のふらと丹唐ふさくしむる

志 道 碩 唐 書 翁 道 肩 志

宵の少くは生かす生かす
まふしとまふる相のかこふし
うらむとまふる新のむらふる
山島の木疎さつく風の初と
石地の坂とひらくや
怪洛さぬ井のちと場し
かゝるさと新のちふ良の澄上
野の唐さぬ花と極ひらけ
かゝるさとまふるまふるあまの

碩 唐 書 翁 道 肩 志

觸前くゆりや初秋の月夜に飛

去来

着白きくくく怪子乃般

翁

小灯をさくくく籠り掛ける

路通

初くくく初らるる夕の幅

丈草

一通くくくくくくくくくく

修治

くくくくくくくくくくくく

車

打明くくくくく人と思ひく

翁

くくくくくくくくくくく

通

物ほくくくくくくくくく

4件

取持くくくくくくくくく

蛇

夕暮るくくくくくくくく

其

泣くくくくくくくくくく

翁

石佛くくくくくくくくく

通

牛の背くくくくくくくく

4件

酒乃徳敷くくくくくくく

蛇

室のハ初くくくくくくく

車

陸奥くくくくくくくくく

翁

啞史くくくくくくくくく

通

餅と記志友をほりふまの
衣小刀年しむら老し草
物とを録をとるふ顔か
疹しとる詠のやとと
片足は指のひまの古き履
あはれらふとちふらくも
候多くつましとるは神を
細の中ふたふ 稿は
崩井と熊進金一と月夜

餅 衣 物 疹 片 候 細 崩 爲 来 然 草 通 爲 耳 然 料

杉別 醫を志見しぬ 疾りさ
やこし 氣よと打かすとも
御 簾のふたふらとる
ふ 観とる 写と通り
畑の中ふらとる 桶
こま 鴻と行例えり
食 色ほとる 官さのう
佛 みるかすとのふとる
草 木とらむ 髪友の白とる

耳 然 料 餅 衣 物 疹 片 候 細 崩 爲 来 然 草 通 爲 耳 然 料

月又しらべふまゝに顔家
 庭の櫛の葉よ表はふぬれ
 火桶ぬる定のも縁の力おとし
 別と申さうにうらまはれ
 尾かしほのやしなうりつる境も
 百家のしるべに水おとし
 寐寤とふ家人形と世も
 白のくらしも世も
 毛しらからぬぬる市井も

為
 尚白
 為
 白
 為
 白
 為
 白

遠うま子のぬつし
 いしししししししししし
 福あつたあつたあつたあつた
 月の前にさしこむひらひら
 桔梗かりやねとて
 信發子ねをさきさき
 大工の櫛をさきさき
 三石の櫛をさきさき
 ハつさうにさきさき

為
 白
 為
 白
 為
 白
 為
 白

存つら白根年重此底り
折ふらるる年一とくむ移り
商人志海ふらるる縁種
とれらるる年一とくむ移り
遊の音なりおとほしむる
口をらるる年一とくむ移り
相の如く一とくむ移り
こらるる年一とくむ移り
意なきはあまのよの月

白 為 不 為 不 為 不 為

路をゆき小忠三日月
こらるる年一とくむ移り
さるる年一とくむ移り
あちの年一とくむ移り
小忠らるる年一とくむ移り
為るる年一とくむ移り
水くさるる年一とくむ移り
意明く春を今一移り
折ふらるる年一とくむ移り

白 為 不 為 不 為 不 為

清明の時を夜をる響ひ
月さし— かくる庭のこころ
旅の穴と茶とちくはあしん
も我帯のちあらしうの形
廣教のさる館と人ふ西させ
又こりし— 急を焼や
の所庵— 願髪し— ちや— 玉
響とすうに 赤人との 汚
山つらふ 浮雲の上おとの海

探志
正秀
昌房
盤子
篇
及看
林之江
志
秀

相おれ集とあ— ちや—
山平合のちたあま— 印— 水
小多— ちや— ちや—
若月よ— ちや— ちや—
新酒志破のち— ちや—
河— ちや— 君— ちや—
ちや— ちや— ちや—
鳴花のち— ちや—
筆月せ— ちや—

為
子
屠
秀
江
篇
志
肩
房

名
 かつり唐おのうらむ打つまじく
 日言くしきまふれまふまの臨
 見りまうり御上るくもこし御
 湖水と春を胸ふさひしを
 臨家まをれ縁をら舞向のま
 唐の柝しれつりし松明
 毛さくまを名敷成しよ月文と
 名所と情世をるのらん景
 しらゆりや勅れまを娘を書紅ぬ
 子 雲 志 唐 翁 江 子 秀

くらりまふしぬからむ徳之
 おぬま男お命のままはひすれ
 ねまふしかたふは華あまぬ
 一振志まうり物を能光のま
 浄瑠璃やまを説師まうり
 風物まうり行まうり所と吹まうり
 馬まののまうりし徳まかまうり
 許る病を白舌竹まうりれのま
 海くまうりしのまうりまうり
 松 翁 江 翁 子 秀 翁 秀

十
昔々此菜のつとふ今もあつた

陸

さかき事だつたさうし

西幸

なまじくふ書らうらへ

江

いくられ山よはらへ

春

汗流さんまかあつたを

香

せあへあへはな

然

風やうはらへ

秀

只一かへ

通

そしへを

芸業

月をよみ

草

杖うせよ

春

西東むら

酒

片輪ある

通

牙切さ

重成

長福

柳沅

おし

秀

職人の

結

南行の

香

鶯の啼くふりくくくく人
空の腐らくくく揚く空まきり
くくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくく
湖くくくくくくくくく
くくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくく

秀 碩 所 面 翁 考 子 成 成

ふ髪友さくくくくくく
くくくくくくくくくくく
夜のつらくくくくくく
くくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくく

翁 好 徑 通 刀 房 子 成 成

とれ句は桃をさかすの記号

芭蕉

去るもあはれなるものぞ

白雪

朝の光をみるに花もさかす

桃隣

さかす花の影をみるに

花影

洗滌のしるしをみるに

洗滌

節のしるしをみるに

節

寝るに花の影をみるに

寝る

さかす花の影をみるに

花影

さかす花の影をみるに

花影

花の影をみるに

花影

さかす花の影をみるに

花影

さかす花の影をみるに

花影

さかす花の影をみるに

花影

さかす花の影をみるに

花影

さかす花の影をみるに

花影

さかす花の影をみるに

花影

さかす花の影をみるに

花影

さかす花の影をみるに

花影

二月の舞のしるしをみるに

二月

芭蕉翁俳諧集中終



